日本特殊教育学会第 60 回大会（2022 理事会） 自主シンポジウムⅠ-26

読み書きの発達に関する基礎と実践の協同に向けて

企画・司会・話題提供者　丹治敬之（岡山大学）
企画・話題提供者　井上知洋（香港中文大学）
話題提供者　松田奈々恵（筑波大学）
指定討論者　高橋知音（信州大学）

KEY WORDS: 読み書きの発達，研究と実践，協同的アプローチ

【企画趣旨】

読み書きの発達に関する基礎的な研究アプローチと支援の場に根ざした実践的アプローチにはそれぞれ意義と限界があり，よりよい支援の実現を目指す上で相補的な関係にある。一方で，これまで両者は独立・並行して行われることが多かった。本シンポジウムでは，基礎と実践の両方のアプローチからの話題提供をもとに，両者をつなぐ有機的な協同の在り方，さらに学校や家庭での支援に向けた具体的な貢献の在り方について議論する。

【話題提供者の趣旨】

話題提供１：読み書きの発達過程に関する基礎研究（井上）

本話題提供では，学齢期の児童における読み書きの発達過程に関する一連の基礎的研究（Inoue et al., 2020 ほか）について報告する。これらの研究は，いずれも縦断研究法（同じ児童を長期間に渡って追跡し，繰り返しの評価を通して発達の過程について検討する方法）を用いたもので，主な焦点は，ひらがなと漢字の読み書きの力が学齢期の児童においてどのように発達していくか，またそれらの発達を支える認知的・環境的要因にはどのようなものがあるかを明らかにすることであった。特に今回は１）ひらがなの音読速度の経年的な発達の軌跡とその予測因子，２）ひらがなの読み書きの漢字の読み書き習得における役割，３）漢字の読み書き習得における形態素意識の役割について報告する。

縦断研究法は一般に発達の全体的傾向を理解する上で有効な方法であり，これらの基礎研究から読み書きの発達の支援につながる重要な知見が得られてきた。同時に，これらの研究法に内在する（容易には避けられない）限界もあり，本話題提供ではそれらの問題点を乗り越えるための方策案に触れ，今後の研究の展開について議論する。

話題提供２：シングルケースデザインを用いた実践研究（丹治）

本話題提供では，発達性読み書き障害のある児童生徒の読み書き習得に向けた，大学と家庭における学習の有効性に関する一連の実践研究（太田・内田・丹治，2022；内田・丹治，2021 ほか）を報告する。これらの研究は，シングルケースデザイン（同一対象者の行動指標を長期にわたり反復測定し，介入の有無等による条件比較から，介入効果を検討する方法）を用いたものである。この一連の研究で焦点を当てたのは，大学での指導と家庭学習との連動の有効性についてであった。これらの研究から，１）大学で成果が確認された方法を家庭学習に導入することの有効性，２）家庭学習の導入と継続を支える人としかけの重要性，３）漢字熟語学習における語彙の重要性，を報告する。

シングルケースデザインは，目の前の子どもの問題解決をめざしながら，柔軟に介入方法を調整しながら介入効果の分析を進めることができる方法である。つまり，基礎と実践をつなぐ役割を果たすことができる研究法である。一方で，本研究の限界もあり，本発表では基礎と実践を結ぶ今後の研究の展開について議論していきたい。

話題提供３：特殊音節の習得と読みの流暢性改善を目指した多層指導モデル MIM を用いた実践研究（松田）

本話題提供では，通常の学級に在籍する小学１年生を対象に多層指導モデル MIM（Multilayer Instruction Model, 以下 MIM）を用いた実践研究（松田・佐野・星・海津・野呂，2020）について報告する。MIM とは，通常の学級における異なる学力層の児童に対して，読みに困難が生じる前に予防的支援を行う指導モデルであり，特殊音節の習得とひらがな・カタカナ表記の単語の読みの流暢性改善に焦点を当てている（海津, 2012）。MIM では指導を行う際，通常の学級を３つのステージに分けて捉え，階層的に指導を進めるという特徴がある（海津ら，2008）。今回は，１）読み学習入門期である小学１年生の通常の学級に対して階層的指導を行う有効性，２）通常の学級内における指導のみでは，読み能力の改善が乏しい児童に対する小集団指導の有効性，３）学校現場において階層的指導を途切れなく継続的に実践するための工夫について報告する。

階層的指導では，大部分の児童が指導に対して反応が見られる場合でも，介入初期から指導に対して反応がほとんどみられない児童の存在が見られることもある。そのため，初期の指導で反応が見られない児童に対して，いかに迅速に的確な指導へ導くかが研究課題として挙げられる。

【指定討論者の趣旨】

基礎的研究の多くは量的研究であり，個人差を誤差として扱うことで，集団における共通要素を抽出する。この知見は「共通要素」なので再現性が高い。一方，実践研究の結果は，事例研究の場合は個人差に，特定の実践場面で行われた研究ではその場面固有の条件に影響を受ける。実践は，基礎研究の知見を実際の支援に近づけるものであると同時に，再現性には限界がある。実践研究の再現性を高める，すなわちより多くの実践者にとって有効な実践となるためには，基礎研究によって解明された「共通要素」を踏まえたものであることが期待される。その上で，個人要因，場面固有の条件が，結果にどのような影響を及ぼしたかの考察が重要となってくる。個人要因や場面固有の条件は，基礎研究において「誤差」とされた要因の中に含まれるものであり，将来の基礎研究の重要な課題となり得る。

指定討論では，実践研究を進める際にどのように基礎研究の知見を取り入れるか，実践に資する知見を生み出すために基礎研究でどのような要因を扱うべきかといった点について，議論を深めたい。

なお，本発表の研究は倫理的配慮に基づいて行われた。

（文献）

Inoue et al. (2020). *J Res in Read, 43*, 364–381.
松田ら（2020）. 特殊教育学研究, *58*, 11–22.
太田ら（2022）. 行動分析学研究, *36*, 149–158.

(TANJI Takayuki, INOUE Tomohiro, MATSUTA Nanae, TAKAHASHI Tomone)